

# 第1回げんきプラザの在り方検討に関する有識者会議 議事概要

## 日時

令和5年6月16日（金）10:00-11:45

## 開催方法

対面とオンラインによるハイブリッド開催  
会議の様子はZOOMウェビナーにて配信

## 議事

げんきプラザの県立施設としての役割について

## 参加者（座長・副座長以下、五十音順）

坂口緑委員（座長）、青山鉄兵委員（副座長）、安藤秀一委員、鈴木秀明委員、星野敏男委員、松村純子委員

## 主な発言

- 市町村立青少年教育設数が減っている状況は埼玉県だけでなく、全国的にも見られることであり、宿泊活動や林間学校などを実施するにあたって、市町村の施設を活用することは困難な状況である。その観点で、比較的広域をフォローできる都道府県立の青少年教育施設の重要性が高まっていると言える。
- 会議資料に、体験活動によって得られる効果や学校以外の自然体験活動の参加率が示されているが、令和元年度の国立青少年教育振興機構の調査では、家庭の経済状況に大きな影響を受けているということが示されている。さらに、家庭の経済状況が厳しい状況にある子供も、自然体験をしている子供の方が様々な資質能力が高いというような結果も出ている。こうした状況を踏まえると、公的な施設が体験活動の機会を格差なく提供できる環境を整備することは意義があり、その観点では、県立のような広域的な施設は重要である。
- 日帰りの体験活動も重要であるが、宿泊の方がより効果が高い体験活動を行うことができる。

- 埼玉県は県立社会教育センターや生涯学習センターがない。県立施設の2つの直営施設を維持した方がよい。直営の施設の中には、都市型の施設があるが、そこに生涯学習センターの機能も備えるとよいのではないかと。県民の生涯学習活動の振興に資するという部分に特化した県立直営施設があってもよいのではないかと思う。
- 宿泊体験活動を通じて、学校との連携、教科領域の連携をさらに深めていけるとよい。学校の授業の中で、教科横断的に体験活動を行っていく方が、子供は自然体験などに取り組みやすいのではないかと思う。一方で、学校だと施設の設備の関係からすべての体験活動ができるわけではない。そこで、げんきプラザを活用してみようという考えに至るような仕掛けができるとうよい。
- げんきプラザは、実際に施設を訪れて体験をするだけでなく、げんきプラザから出前事業という形で、学校に来てもらい、新型コロナウイルスの影響で体育祭や文化祭ができなくなった代わりに、ピザづくりを行った。ただ、げんきプラザに毎回出向いてもらうわけにはいかないの、例えば、げんきプラザを利用している社会教育団体から、学校にゲストティーチャーとして来てもらい、小学校であれば、子供たちに昔遊びというものを教える活動であったり、中学生であれば、美術や工芸等専門的な分野の講座も依頼できるのではないかと思う。げんきプラザが、こうしたコーディネーター的な役割も担っていけるとよいのではないかと思う。
- 学校の先生たちも、やらなければならないことは多くある中で、学校のカリキュラムの中に体験活動を具体的に組み込むということは、なかなか難しい面もあると思う。一方で、学校で進めようとしている主体的な学びや対話的な学びなど、学校現場で子供たちが身に付けたものを実践する場として、また子供たち自らが生かす場としてげんきプラザを活用していく、あるいはげんきプラザの提供するプログラムを通じて、先生たちや子供たちが学んできたものを発揮できる場を提供できるような機能を持たすべきである。
- 今の時代の子供たちは、家庭で育つ時間が非常に長く、家族以外の人間にどう接していいかわからないのではないかと感じる。こうした子供たちは、人間関係を構築する能力を身に着ける機会がないまま、小学校は1学級ないし2学級だけでやってきた中で、中学校には複数の小学校から進学してくる。知らない人たちばかりの環境で、どのように対応してよいかわからないまま、不登校になる子供もいたり、友達との関係の持ち方がわからず、いざこざになってしまう子供もいる。このような子供たちに出会って、いろいろな話を聞くと、体験活動の機会が少ないという状況が伺える。これまでいろいろな体験をす

る機会があれば、このような状況にはならなかったかもしれないと感じることもある。

- 中1ギャップについては、コロナ禍でなかなかコミュニケーションが取れず、人と人との関わりがある程度限定された中で、中学校へ進学しいろんな人と関わりを持たないといけないという状況になる。そういった背景で生じてくるのではないかと感じる。そうならないように、小学校では1年生から6年生までいろんな学年を交えて、多人数での活動の機会を取り入れながら、少しでも自分を周りの色々な人とコミュニケーションをとれる活動を行うようにしている。そういった意味で、体験活動というのはすごく有意義で貴重な活動であると感じる。そういったことをげんきプラザで行っていただけると良いと思う。
- 青少年教育施設は、時期によって利用者数の波がある。逆に閑散期は大勢の他の利用者に会わずに利用できるという利点もある。宿泊という側面があるので、施設側が対応するのか、学校側が対応するのかという課題もあるが、不登校で学校に行けていない子供たちにとっては、他のメンバーと協働しなければできない野外炊飯のような活動も可能であるし、他方で、誰ともかかわらず1人でやりたかったら「ソロ」という形式で、考えながら実践するというように、様々な不登校の子供たちにとってプログラムができるのではないかとと思う。
- 国立の青少年教育施設では、国立の病院機構と連携して、ネット依存の子供たち向けのプログラムを実施した。こうしたプログラムは、急に効果が出るわけではなく、少しずつ効果が出るものである。そのため、1泊だけでなく、長期的に実施していくことが重要であり、青少年教育施設を活用し、例えば、不登校等の課題を抱える子供たちに対するプログラムも実施できるとよいのではないか。一方で、対象を不登校やネット依存に限定してプログラムを展開することはなかなか難しいように思う。青少年教育施設がまず第一義的に取り組むのであれば、ユニバーサルなアプローチの中にターゲットニーズを包含していくようなやり方が現実的であると思う。